

あらかわWEB探検隊・発表交流会  
パネルディスカッション  
「あらかわ学会は小中学校の環境学習の応援団になろう！」

**抄録**

2002年10月26日

於：中央工学校 STEP ホール(東京・北区)

パネラー

後藤良秀氏(北区教育委員会指導主事)

八木勲氏(荒川知水資料館長)

萩原吉弘氏(映画監督)

司会

大平一典(あらかわ学会理事)

## あらかわ学会シンポジウム

司会

みなさんおはようございます

今日はあらかわ学会の年次大会にお集り頂きましてどうもありがとうございます。あらかわ学会の年次大会も今年で第7回目を迎えまして、もっとよい荒川を、あるいは愛すべき荒川を皆で考え作っていこうという盛り沢山の試みが今日一日にプログラムされております。

さて、これからここでは「あらかわ WEB 探検隊」のプログラムが始まります。その前に「あらかわ WEB 探検隊」の成り立ちについて少しお話します。これまで、あらかわ学会は様々な形で考え行動してきた訳ですけれども、さらに若い仲間達や子供達、あるいは教育にあたっている先生方、こういった方々をも含めて荒川をより良く、そして愛せることにしていこうということで、今年から「あらかわ WEB 探検隊」というプロジェクトが始まりました。

第1部では、WEB 探検隊の今年度の取り組みの意味、これからの展望などをパネルディスカッションという形で皆さんにお伝えていこうと思っています。

第2部としましては、午後になるんですけれども、是非「あらかわ WEB 探検隊」を実体験して頂きたいと思っております。荒川は知っているけれども、web サイトを通じて荒川を体験するとどうなるのか...これも楽しみではないかと思っております。

例年通り、あらかわ学会の年次大会では、研究活動報告、発表を行います。12時半からこの上の4つの教室をお借りしまして40数件の発表を皆さんと共に拝聴、もしくはその場でディスカッションして頂きたいと思っております。

さらに、3時40分からとなりますけれども「フォーラム交流の歴史と荒川と人々の今」という内容の、皆さんと語り合うような会をプログラムしております。

長い一日になりそうですけれども、楽しく有意義に過ごしていきたいと思えます。もちろん最後には、楽しく語り合う懇親会も用意しておりますので、是非おつきあいして頂きたいと思っております。最後になりましたけれども、この「あらかわ WEB 探検隊」の企画にあたりましては、河川環境管理財団の方から助成を頂いております。この場をかりて厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

【拍手】

司会

どうもおはようございます。

それではあの、これからパネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。テーマは、『総合学習、環境学習の応援団になろう』です。

「あらかわ WEB 探検隊」は、子供さん達に、web やインターネットを通じて荒川をより知っていただくという試みとして始まりました。と同時にインターネットだけじゃなくて、具体的なフィールドでいろんな活動をしている子供達の学習のお手伝いもできたらということも考え、今日のテーマを設定いたしました。

申し遅れましたが、今日の司会、あらかわ学会の大平でございます。

今日のパネルディスカッションは内々の会でもございますので、日頃私達が話しているような形で、ざっくばらんな会にしたいと思っておりますので、よろしく願いをいたします。

それでは自己紹介もかねて、一言ずつパネラーの皆さんからお話を頂きたいと思っております。

最初に北区の教育指示をなさっている後藤先生でございます。学校教育に携わっている立場から、日頃お考えのことをお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### 後藤

はじめまして。北区教育委員会の指導主任をやっております後藤と申します。

私は北区にきて5年目なんですけれども、その前は小学校の教員をやっておりました。教員から行政職にやってきました、学校と教育委員会のパイプのような役目をやっております。

さて今年から正式に総合的な学習がスタートしました。北区で言えば、小学校の3年生以上中学校3年までになりますが、年に105時間、週に3時間くらいの扱いでやってます。これは理科や社会科の授業数より多いんですね。理科や社会は2時間ちょっとくらいです。その時間より多くの時間がさかれ、さらにその授業の内容は各学校で全て決める、どういうふうな子供の力を育てるかという方針も各学校で全て決めるという感じなんです。

御存知の方も多いと思うんですが、これまでは全て教科書に沿って、その内容をどのように身に付けていくかっていうのが学校教育の大きな狙いでした。ところがここ2年間の移行措置を経て「生きる力の育成」という流れが生まれました。学校が子供をどう育てたいかを明確にして、特色ある教育を作っていって欲しいということですね。

これは実は学校だけじゃなくて、今日おいでの皆さんにも関わることだと思うんですけれども、その地域、例えば北区として子供達をどう育てるかということも含めて、もっと個性豊かに特色付けてやっに行こうということでもあるわけです。

そしてその流れの中の大きな中心が、北区ではこの荒川を通じた学習になるわけです。先生だけで作る教育から、住民の方、区民の方、そして北区では第4の領域っていう言い方をしているんですけども、ボランティア団体などの力のある方々にですね、もう少し教育への支援ということで手伝っていただいて、子供達が学ぶ広い世界を教師と一緒に作って行けないかと考えています。

皆さん方には日頃からそういうことで学校に出向いて頂いたり、お話をきいて頂いたり、多大な御支援を頂いております。さらにその具体的な内容について、御意見等ありましたらお教え頂きたいと思っております。簡単ですが最初はこのくらいで…。よろしく申し上げます。

#### 司会

では続いて、荒川下流工事事務所が設置しております「荒川知水資料館」というのがございます。全国の資料館の中でも、非常なユニークな活動をされているわけですが、その八木館長においでいただいております。よろしく申し上げます。

#### 八木

八木でございます。

荒川知水資料館は、平成10年の春に荒川下流工事事務所と北区が共同で設立し、現在も運営しているものでございます。おかげさまで10月9日で来館者が30万人を突破いたしました。

わたくしども資料館の最大の特徴というのは、単に展示物を通じて学習教育に役立てるということだけでなく、地域との交流に力を入れていることが挙げられるかと思えます。その延長線上で私達は、総合的な学習の支援に特に力を入れているわけです。

この総合的な学習の支援につきましては、実際に総合的な学習が始まる前、平成11年から準備にはいりまして、この9月末現在で162校、5900人の子供達が資料館を拠点にして勉強をしてきました。

都内からは10区1庁と多摩、その他に埼玉県、宮城県、さらに愛知県というところからも子供達が来ております。遠隔地の子供達は修学旅行を兼ねて来館し、自分達の地元の川と荒川との違いを調べたり、というような形でだんだんと地域の輪が広がっていているのが実情です。これに備えて私達受け入れ体制側も、いろんな人材をそろえたり機材を揃えたりして、総合的な学習を側面からバックアップする活動を一生懸命やっております。

## 司会

ありがとうございました。それでは最後に映画監督として「荒川」や「続荒川」というドキュメンタリー映画、総合学習のビデオを作られた萩原監督をご紹介します。教育関係とは無縁と言っていくらい異質な方になるわけですが、どういうことからこういう映画をお撮りになられるようになったか、あるいは総合学習に関心をもつようになったかを、自己紹介も含めてお願いいたします。

## 萩原

どうもおはようございます。萩原です。

一番最初に僕が荒川という川に付き合い始めたのはかれこれ10年前になります。当時荒川の上流で滝沢ダムというダムを建設するという計画がありまして、そこで20何年間も建設に反対している村落の方々がありました。その人たちを取材しようというプランが持ち上がりまして、監督を始めたのがきっかけです。結局それは、映画を撮っている最中に反対同盟の方々が妥結して、その地区は水没が決定しました。もうそろそろダムも上にあがって完成する頃じゃないかと思えます。

最初はダム建設反対という立場で映画を作ろうと思っていました。しかしだんだんその地区、大滝村といいますが、そこで反対しているお爺さんやお婆さん達と生活しているうちに、ダムという問題だけで考えていいのかなと思うようになりました。

問題になっていることが、それぞれ点でしか考えられない。上流ではダム、下流では水質の問題というふうに、点在した問題があちこちで噴出していてなんか結びつきがない。

それでとにかく、その源流から東京湾に達するまでの川そのものを見て、川が抱えてる問題がいったい何なのかというのを見直してみようというのが一番最初の映画の意図でした。

ドキュメンタリー映画っていうのは、完成した後、監督がフィルムを持っているところに巡業に行きまして、映画を観ていただいたりするんですが、そこで皆さんと話をしていると、川と向き合っただけで何かをしていくっていても具体的にどうしたらいいかわからないというジレンマを、多くの人達が抱えていました。

それならば、実際にどうしようか、どういうふうに川を見ていこうかという指針を作ろうとしたのが2作目の「続荒川」という映画でした。“水の共同体を求めて”というサブタイトルをつけたのもその現れです。

そして実際の撮影では、自分自身が河川流域に存在していることを非常に強く意識している人や、川とどうやってつきあっていこうかと悩んだり実行したりしている人たちを、一人一人取材していったんですね。

例えば中流にまだ下水道も完備してないのに新興住宅街が作られた地域があります。その住宅

で生活している人がある時ふと考えるわけです。自分が使っている生活水はどこに流れていくのだろうと…。

調べてみたら川に直接流れていって、非常にショックを受けます。それからその家族が、家族会議でいろいろ議論していくうちに、自分の敷地内に浄化槽を作ろうということになります。しかも、当時合併浄化槽っていうのが流行っていたんですけど、そうじゃなくて土壌浄化法という、土壌の微生物で処理する方法を取ろうということになります。

あるいは有機栽培をやりながら、なんとか土を元気にさせたいと考えている人。でも水が汚くて悩んでいる、そんな農家の人とか…。

そういう人達が土や水を考えながら、まさに河川の流域に生きる生きざまを見せていく。そんないくつものエピソードをまとめていったのが「続荒川」でした。

さらにそれをあちこち見せてまわっているうちに、むしろこういうことは子供にわからせたい。もうちょっと子供にわかるようにできないかということをあちこちで言われました。

それで「続荒川」に出演してもらった実際の農家の人、漁師の人、あるいは最上流の大滝村で林業を営んでいる人、いろんな方々とまた相談して、実際に俳優である子供達をその現場に放り込むからいろいろ教えてやってくれと。それをドキュメンタリーで撮るから、ということになりました。それが総合学習用のビデオです。これは3年くらい前に制作したわけですが、その時の僕自身のキーワードは、実体験させるということでした。見る、触る、匂いをかく。食べる。それともうひとつは表へ出て行って人と出会って自分で意見を言う。こういったことを中心にしながら3本のビデオを作ってるんです。

その時ビデオで作った時の子供の反応とか、作りながら僕自身が考えた総合学習のありかただとかを、パネルディスカッションの中でお話していければなと思っています。

## 司会

ありがとうございます。

一通り自己紹介を兼ねてお話していただきました。

学校の現場を経験し、今の先生方の支援、黒子になって支援をする立場の後藤先生。それから先生方が困ってきた時に、一緒になっているんな体験のプログラムを作ったり、コーディネートをしている八木館長。それからまた違った立場で冷静に、子供と環境の問題にとりくんでいる萩原監督。こういうメンバーでこれからパネルディスカッションを進めさせていただきます。

では最初に後藤先生。御自身も先生をされていたわけですが、今の黒子の立場で考えた場合、学校の現場ではどんなことが求められているか、あるいは困っているか、また先生方が抱えている課題について、ざっくばらんにお話いただけませんか。

後藤

わかりました

とにかく初めての経験なんですね、教師にとってこういう学習の作り方というのが、

例をあげて少し話しますと、例えば川という存在があります。

川について、今まで小学校や中学校でどんな勉強をしてきたかと言うと、おそらく川そのものが対象になるのは理科が多いですね。

で、理科では、川は上流から下流まで流れるということとか、その時に土を削ったり、運んだり、そういうことをする作用があるだとか、内側はどうで外側はどうだ、削られ方はどうだなどが、小学校の勉強になります。

中学校になるとそういった内容はほとんどありません。社会科で川に関する公害のことや、水質に関することが出てくる程度です。

ところが総合的な学習になると、対象は荒川なんですが、子供達が関心をもつ世界はもっと色々な方向に広がります。

川にどんな生き物がいるのかとか、川を行き来してる船の種類はどんなのかとか、この川の上流はどういうところなんだろうとか、水ってどこから来るんだろうとか、非常に素朴な疑問から高度な疑問まで幅広く出てくるんです。

しかし私達教員には、そういう学習プログラムをこれまで作ってきた経験だとか、そういう指導法の経験がほとんどなかったんです。元をただせば、学校教育は知識をいかに効率的に習得させるかっていうことに、130年近くを費やしてきたわけです。

ここにきて初めて、「学び」というのは何かを考えだした。子供が関心をもったことをどう学んでいくかという、プロセスを作っていかなければならない。学校教育では、教えていく部分と創造する部分と両方あるんですね。その創造する部分にもっと力を入れようっていうのが総合的な学習ですから、教師はどう創造させるかといふことに、今とても苦労しています。

一方では、皆様方も御存知の通り、学びのすすめっていうのが文部科学大臣から出されました。【遠山プラン】っていうものですね。基礎基本をもっと徹底して、子供の知識や技能をより高めていかなければならない。そして総合もやらなきゃなんない。基本的な知識や技能と、考える力や判断する力や表現する力という両極にあるものを結び付けなくてはならないというのが今の学校の状況です。

従って先生方が、あらゆる工夫をしているんですけども、どうしても今まで自分がやってきた得意な教え方とか、得意な内容にかたよってしまいがちです。

しかし一方で新しく開発していかなければならないことについては、時間もなく、また経験、どこに行ってもどのように研究すれば「学び」が組み立てられるのか、そういう経験が少ないのが現状です。

また学校にはそういう面、つまり外に行って自分で情報を集めて、その情報をうまくミキシングして、どういうプログラムを作ろうかというのが得意先生と苦手な先生が当然います。得意な先生だったら例えば知水資料館に出向き、荒川の様子を見て、そしてプログラムを立てるんですね。しかし今話したように、皆が皆そうではありません。

そこで北区では、北区の自然である荒川というフィールドを、どうやったら子供達が学ぶ対象にできるかということ館長さん等と一緒に模索してきたわけです。どういう体制を組んで、どういうものを学ぶ対象にすれば、多くの学校の子供達が荒川を学んでいけるだろうかと...いろいろ考えて今の知水資料館のシステムや内容の整備を進めています。少なくともこのような支援形態をとっておけば、多くの先生方や子供達は学ぶ対象を料理するだけでいいわけです。本当は素材も全部自分で選んできてほしいんですが、まずはそういう経験の場を作ることですね。この経験が積み重なっていけば、やがて先生自身の力で新しい荒川の切り口を見つけていけるんじゃないかと思っています。

ここで荒川という対象について少しお話しますと、総合的な学習の対象としては、環境が全国でトップです。中でも水とか川ということに対する関心が非常に高い。北区でも同様なのですが、もう一方の側面としてゴミとかリサイクルに対する関心も高いんですね。これはやっぱりより身近なんだと思います。水とか川っていうのはもっと奥深く学んで行く対象なのだろうと思っていますので、お力貸して頂きながら、もっと学びやすい状況を作り、全体を整えていくべきだなと思っています。

もう一点だけお話ししましょう。こういう流れの中で、今まだ不十分なのがカリキュラムです。川にはどんな学ぶ点があって、それはどこにどういうふうに出かけて行って、そしてどういう方々の教を請いながら学べば子供達は豊かに学べるかという情報や、何年生でどんなテーマがいいのかというあたりがまだ整理されてないんですね。

荒川には単発の素材がいっぱいあります。しかし単発で終わるのではなく、それを少し整理していろいろなものに結び付けていくのが重要だと考えています。まずはあらかわ学会やWEB探検隊などの情報を学校側にも御提供いただき、そしてその後を共同で開発していく。

先生が職員室で、明日の総合をどうしようとか、この後の総合をどうしようかっていう時代はもう終わったのです。

例えば知水資料館にでかけて、館長やそのコーディネートのこだまさん等と相談して、こんな総合したいんですけどもどんな知恵がありますかと、その時に何かお手伝いしていただけることは



あるでしょうかと、そういう授業作りを先生にやって欲しいのです。

北区では、先生達にでかけて頂くために、知水資料館で研修会をやっています。先生達にボートをこいでもらったりもしているんですね。するとボートをこいだ後では先生達の感想が変わるんですね。水辺から陸地を見る経験がなかったんですね。そして静かな水面との関わりの中で、子供達にもそういう体験が必要だって感じるわけです。

先生達がもっと感じたり実行していただくような素材が、荒川の中には沢山あるし、それを支援するボランティアや皆さんの方々のような力が一体になれば、子供たちはもっと元気に学べるような気がしてなりません。

#### 司会

今先生の話にも出たんですけれども、先生方は一生懸命やる気をもって取り組んでおられるんですが、実は先生方自身が一番社会を知らないというか、教室の中だけで物事が完結してしまうような発想法に陥っているという感じがします。このへんがまず最初に取り組みなきゃならない課題なんじゃないかという気がするのですが…。

八木さんは、先生方から御相談を受けて、一緒にいろんなプログラムを開発されたりしてるんですが、八木さんから見た今の先生方の問題点、こういうところが少し努力が足りないよということや、こんなやり方は効果があったよということを、実例を含めて2.3 御紹介していただけないでしょうか。

#### 八木

先生方というのは、総合的な学習が始まる前までは川になじみが薄かったんですね。何故ならば、川は汚いし危ないし近寄っちゃいけないと、家庭でも学校でも言っていたわけです。それで総合的な学習が始まって川がにわかに注目されても、実践的な視点が乏しいんですね。

先程後藤先生がおっしゃられたように、昨年の総合的な学習のテーマに関する調査の中では、どの調査を見ても大体8割が環境をあげております。そして環境にもいろいろあるけれどもどんなことに絞り込むかということについては、川がダントツです。全体の8割の方が自然環境をあげて、その8割のうちの8割が川をあげています。

荒川知水資料館は、総合的な学習の拠点と言われていますが、その主な理由はやはり荒川と目と鼻の距離にあるということがあります。それと開館以来行ってきたワークショップの中で総合的な学習に限りなく近いものをずっとやって参りました。ワークショップは現在すでに130回行われ、1万6000人ぐらいの方が参加しておりますけれども、そういったノウハウの蓄積があるということも大きいと思います。

その活動の中で、受け入れ体制を整備し162校の学校に対応してきたわけですが、先生方を垣間見ておられますと色々な方がいらっしゃいます。川を知らないのはそりゃ無理からぬところという気もします。しかしわたしどもとしては、子供が実際に資料館で総合的な学習を展開する以上、先生方が子供達の課題についてきちんとチェックし、熱意を持って支援をして下さると、資料館での学習がもっと効果的になると痛感しています。

子供達が来るのは開館に合わせた9時半。それで12時前に帰りますので、資料館での滞在時間はだいたい2時間くらいになります。この2時間の中で効率的に学習を展開するというのは、やはり先生がしっかりしていらっしゃらないと無理じゃないかなと思います。総合的な学習の基本は体験学習ですから、先生自身が川についての体験が極めて薄いことは止むを得ないことだとしても、かなり事前の準備が必要だと思います。

まずしっかりした目標、つまり子供達に総合的な学習を通じてどんな力をつけさせるのかという目標をたてて、次に学習計画というのをきちっとたてて資料館に来なければ、2時間も単なる遊びになってしまうのではないかというような感じがいたします。

もうひとつは、フィールドで例えば植物観察、野鳥観察、昆虫採集、あるいは汚れや水質調査を調べてみることを実際に展開しておりますけれども、先生お一人では限界があるんだと思うんですね。やはり実体験に基づいた解説なりエピソードなり逸話なりを、子供達に話ができるような方々の人がどうしても必要じゃないかなと。

資料館では、教育ボランティアという方を6人登録しております。これは理科系で校長先生を退職した北区のOBの先生方です。その他に北区のご好意で、科学センターから必要に応じて2人の先生方に来て頂いております。さらに環境学習コーディネーターというのを今年の1月から一人常駐させておまして、総合的な学習についていろんな相談に応じられる体制を整えております。しかし、幅があり奥行きがあり深みのある学習を展開するためには、地域の方々の力を借りるとさらに効率的な内容のある学習が展開できるんじゃないかな、とも思っております。

いずれにしても、総合的な学習というのは自ら学び自ら考え自ら調べて自ら問題解決するというのが建て前ですから、わたしどもとしてはあくまでも支援、つまり相談にのる、アドバイスをするという立場でやっているわけです。

だから、実際にどんなことを資料館でするのか、何をしてほしいのか、それがはっきりしなければ歯車のかみあった学習ができないわけです。そのためにわたくしどもは、先生に下見に来てください、そういう打ち合わせをした上でやりましょうといつも申し上げております。

僕は総合的な学習は楽しくなければならぬと思っております。これは日頃から痛感していることですが、楽しく学んだ事柄ならば子供達は忘れないんですね。身につくんですね。

実際に総合的な学習が導入されて今年で1年目ですから、先生方も大変だなあということはわかりますけれども、総合的な学習を左右するのはひとつに先生の熱意。それから先生の気質の問題ではなからうかというふうに思います。

#### 司会

八木さんなんかにお話を聞きますと、子供達に魚というものがどういうものか実体験させようということで釣り竿を持ってこさせたことがあるそうです。ところが何が釣れるかとか、どんな魚にはどんな仕掛けがいいということを先生も知らないし子供も知らないものですから、全然違う竿とか仕掛けもってきてしまう。一日子供がいて何も釣れないで帰っていくというようなことがあったそうです。資料館ではハゼ釣り大会もやっていますし、ボランティアの方で魚釣りの名人もいっぱいいらっしゃるわけですね。そういう方々がもし協力してくださったら、本当に生きた学習ができるんじゃないかと思うんですが、繋ぎがうまくいってないのかもしれないですね。

#### 八木

荒川では6月の梅雨の前後ってというのは、手長エビがかなり釣れます。その後はもうハゼに移る。年間ではコイが釣れます。例えば、ハゼ釣りのときに、今年は手長エビがだいぶ釣れたからハゼは先行き釣れないんじゃないかというような話が釣り人から出ます。それは何故かというと、手長エビがハゼの子供を食べちゃうんですね。それで手長エビがたくさん釣れる年はどうもハゼが思わしくない、というふうな相関関係があるようなのです...そこでこの話を子供達にすると、子供達はほんとに興味もって聞いています。

また、ワークショップで植物観察をしたことがございます。子供も参加しています。資料館のある岩淵からずっと荒川を下りまして、扇大橋のところまで行って、いろんな植物を観察しながら採取するというものです。その途中でコーディネーターが子供達に、これはタデというんだよ、今まで聞いたことあるか、それつまんで食べてみると言ったんです。子供達が食べて見ると苦い。ことわざにある「タデ食う虫も好きずき」というのはこのタデの味のことで、こんなものを好んで食べる虫だっているんだよというふうな話をする。子供達は実際にタデを噛んで苦い、苦いと言っています。これはおそらく一生忘れることがないと思うんですね。

僕はやはり総合的な学習というのは、こういったことを大きくとりあげて、子供達にいろんなことを体験させていくということが必要なんじゃないかなと思っています。

#### 司会

体験という話が出ました。先程監督から出会いという話も出たんですが、総合的な学習の中で、出会いという要素は大きいのではないのでしょうか？

監督とはもう7、8年くらいのお付き合いですけど、いつもの調子で少し総合的な学習をバシッと切ってくれませんか。

萩原

実際僕が川の問題っていうか、そういうのに取り組んだ時にどうしたかっていうと、まずやっぱり本を読みましたね。いろんな専門書から何から何十冊と読むんですけど、ところが何ひとつわからないんです、むずかしすぎて。そこで、小学校3、4年生の社会科の水の循環なんていう本を読むのですが、機能はわかる、理屈もわかるんですが、ただそれだけであとはさっぱりわからない。結局どうするかというと実際に行くしかないんですね。

例えば、山が荒れていると言うけどもそれはどういうことなんだと思えば、そこへ行ってみないとわからないんです。針葉樹があるから荒れていると言うがそれはどういう意味？ 雑木林があるから大丈夫だって言うけれどそれはどういう意味？...こういうことが実際に行くとわかるんですね。一発でわかるんです。歩いてみると針葉樹の森の地面が固くなっちゃってるんです。ところが雑木林を歩いてみると、その地面はふかふかですね。腐葉土がいっぱいあって積み重なっていて、全く違うんですね。

それと針葉樹林なんかは、雑木のように葉っぱが落ちませんから腐葉土っていうものが作りにくいんですね。どんどんどんどん表面の土地が雨で流されて、地面がどんどんどんどん減ってっちゃうんですね。そういったところは実際に行ってみないとわからない。

もう一つは、いい所ばかり見せる必要はないんですね。現実を見せるっていうことが大事だと思うんです。

例えば子供達に中流の川漁師さんに船のせてもらい、どんなものが獲れるんだと見ていると、ボラか網に何匹も入っていて子供はおおはしゃぎです。荒川はいい川だなあ、魚がいっぱいいるなあ...。じゃあ次ということで、蛇行しながらところどころに溜まりができていところへ連れていくんですね。そこでいきなり漁師さんが竿でガリガリガリやるわけですよ。するとゴミとか、分解しにくいものがたまってヘドロ化したものとかがドワーっと出てくるんですね。子供達が目を背けるくらいに。匂いもひどい。メタンガスですね。そこで漁師さんが言うんです。結局お前らは川に魚がいれば川は生きてると思っているが、それは大間違いだと。現実にはこういうふうに川の底は死んでいっているんだぞと。子供達は非常にショックを受けていました。

しかしそれは、ただのショックを受けたわけじゃなくて、ある意味では事実を、真実に迫る学習を受けたわけです。

さらに授業で水質の問題をやると、必ず水質の検査をやる。でも何故水質の検査が必要なのかは考えないわけです。ところがその川漁師さんのところへいった後では、水質を検査することがなんて大事なんだと、実感を持ってわかってくる。

いわゆる情報を伝えるということではなく、子供達をもっと本質や真実に近づけて行くことが本来の学習であって、そういうことができるのが僕は総合的な学習じゃないかと思うんですよ。

#### 司会

まさに今の話が本質になってくると思うんですけども...。監督が最初に言いましたように、難しい本を何十冊読もうが、知識としてはわかるけども、もうひとつピンと来ない。ところが現実に行くと知識とはまた別のところで直感的にいろんなものがわかってくるし、見えないものが見えてくる。

川漁師さんの話は、荒川の秋川線の下くらいですね。そのあたりにヘドロがいっぱいたまっています。漁師さんにそういう状態を見せられた子供達に、臭いというのはわかるが何でそうなんだろうか、どうしたら川が綺麗になるんだろうか、というところまで考えてもらうにはどうしたらいいか...その繋ぎのところですね、知識と実体験の。その時に重要なのが、先程後藤先生がいわれたカリキュラムなのだと思います。

まさに知識先攻の先生方と、現場主体の我々。この間をどうやって繋いでいくか。そして我々の知識をうまく使っていただく、経験を使っていただく。それが総合的な学習の応援団になろうという今日のテーマでもあると思います。

このカリキュラムということについて、話を進めていきたいと思うんですが...

#### 萩原

あの、いろいろこう取材していきますとですね、凄い人が多いってことに気付いたんですね。農業生産者や、漁師、それから林業の方、そういう人たちは人に伝えたいという気持ちがうんと強いんですね。それは生業自体が、自分の人生観であるし自分の人生そのものだからだと思うんです。僕はまだ10人に満たない人達しか知らないんですけども、ちゃんと調べれば最上流から最下流までそうとうな人数がいるんじゃないかと。そういう人たちをうまく繋げて、応援団になって頂いたらいいんじゃないかという気がしています。

#### 司会

どうですか後藤先生、八木館長。どうぞ自由に発言をしてください

八木

総合的な学習の学習指導要領の中で、狙いの一つに地域の協力を得るとということが明記されてるんですね。やっぱり先程申し上げたように、先生の指導や我々ボランティアのバックアップだけでは、とてもとても子供達に満足させられるものっていうのは無理だと思うんですね。

そこでやはり地域に根付いて、そして生活体験の中でいろいろな蓄積を持ってらっしゃる方々に御支援を賜るとというのが一番だと思います。そういう方々の話には説得力がありますから。それからいろんな事例を見ておられます。

例えば、荒川はバブルの頃と比べると水が綺麗になっております。そうなると汚れた水に多く棲息していたゴカイの姿もなかなか見られなくなりました。ゴカイは1月の満月から4.5日経つと、バチヌケといって川底にもぐっていたのがいっせいに水面に飛び出します。それはもう見事なもので、1日か2日の現象なんだそうですけれど、それを写真にとって館内に展示して下さる方がいらっしゃいます。そういう経験の話は、子供がどんなに興味をもっていても、資料館の方でもできないし先生方もできないと思うんですね。

この方に限らず、地域の方々、専門的な知識をもってらっしゃる方々に支援してもらおうということが、総合的な学習の成功には欠かせないと痛感しております。

司会

後藤先生いかがですか？

後藤

要するに勉強の仕方ですね。今までは「学校教育、校門を出でず」という言い方をされてきたんですね。学校で一生懸命習ったことを、帰りに机の中において帰っちゃう。実生活に何にも役立たないという言われ方をしてきました。それはそのことが本当に役に立たないんじゃないじゃなくて、やっぱり勉強の対象とするものが、現実と関係の薄いもの、子供と関係のないもの、子供が自分のことだと実感できないものだったということだと思うんです。

ところが今のような、館長のお話とか監督のお話の事例というのは、子供も多分大人も、とっても関係あると思って勉強できる対象なんですよ。荒川のゴカイのこともそうでしょうし、荒川の下流から海水があがってきて、塩分濃度が時間によって違ってくるなんてことを学んでくるとですね、非常に面白くなってくる。そういう勉強が今まであまりにも無さ過ぎたんですね。

理科室にいて食塩水を作って何グラムまで溶けますか、ハイ何グラムまで溶けますというのが今までの食塩の勉強だったんです。それが自分に何の関係があるのかというふうには考えてこなかった。実は塩分濃度が高いと身体に良くないなんて、そのくらい関係じゃないはずなんですね。

海水のバランスが3.4%に維持されているから、生物が生きていられるし地球が存在しているというような、もっと大きいことにいつかは繋がるんだろうというような実感が重要だと思うんです。

そうやってみると、教育は学校だけじゃなくてまさに生涯学習としてとらえた方がいい。一生学び続ける対象としての、川だったら川なんです。

そういう大きなスパンで考えたときに、小学校中学校の基礎教育の中で何をすべきか、ということが始めてはっきりしてくると思います。もっと言えば、小中学校で学んだおもしろさや、美しいと感じることや、そういったことを実感する力が、大人になって川を振り返る力になると思うんですね。

わたしが何で川のことを好きでこうやって関わっているかと言えば、学校で習ったからじゃなかったんです。わたしは九州出身なんですけれど、川で釣りをするのが大好きでした。川のどこにいけばどういう生物がいて餌になるかとか。冬場の魚はこういう状況でじっとしているからそこに手を延ばせば獲れるはずだとか。この時期になれば産卵だから、そこに来た魚をひと絡げでぱっと捕ればいいとか...。体験的な学びを通しながら、自然の摂理だとか自然の訴えるものを学んだってことが大きかったと思っています。

ところが、今の子供達には機会を提供してあげなければその場がないんです。

川に近付いてはいけません。危ないから写真やパソコンやインターネットで見なさいと言う。そこには綺麗な映像が見えますが、それは決して心の中から、全身を揺さぶることはありません。身体が実感していく学びというふうにはなりづらいんじゃないかと思っています。

体験的に学んでいると、やがてそのことが知識を求める気持ちを引き起こします。どうしてだろうと思うんですね。もうちょっとこのことを知りたいなあと。なんで今までいた魚がいなくなったんだろうと。水質はどうなんだろうと...。水質がどうなんだろうと思ったから、自分の中に本当に調べる価値が生まれるんですね。

そうじゃなくて短絡的に、川、イコール水質、イコールパックテスト。汚れてた、あっ汚い、荒川は汚い...こういう結論をつけさせる学び方ダメだと思うんです。

例えば水質のことであつたら、過去との比較が必要ですね。今はこうだけど前はどうか。あるいは生物で見る水質も必要です。薬品で検査する水質の見方も必要だと思います。またどういうふうに関わって人間がそこに頑張って努力してきたかで見える見方も必要なんです。

総合的な学習には、何かを単一的にじゃなくて、総合的あるいは多面的に見通せる力を育てていきたいという願いもあるわけです。そしてその多面的な見方が、小学校だけで完結するわけではなく、中学校だけでも完結せず、一生を通じていろんな角度からいろんな価値観を入れて豊かになっていくわけです。

例えば、大人になった時の荒川の見方は、今子供達が学んでいる世界から立ち上がって、大きく変化し深くなっていくはずですが、しかしいずれにしてもベースがなければ、変化のしようがありません。だから総合的な学習に実感のともなったものを、特に小学校の低学年には美しいとか楽しいとか不思議だとか、そういう思いをたくさん抱かせるような環境教育、水とのつきあい方、川との関わり方を、大人がセッティングしていく必要があると感じてなりません。

そしてその大人は、やはり教師だけでは無理だっていうことは先程お話しに出た通りです。

川好きの先生はできるんですね。でも川が嫌いな先生もいるんですね。そうするとそのクラスにいた子は川にまったく触れずに通ってしまうということが本当にいいのかっていうことだと思うんですね。もちろん環境のことだけじゃなくてすべてそうです。学ぶチャンスの幅を広げてあげて、その子に合う世界を見つけ出してあげるのも重要だと思います。カリキュラムが整理できている教科だけをきちんと学ぶ時代から、いろんなものがあるからどれが学びたいんだ、どれがあなたのライフワークに繋がるんだ、生き方に関わるんだということを問い掛けていく時代になっていると思います。実感できる学び、本物を味わう学びを作っていきたいなあという思いが強いです。

#### 司会

総合的な学習が、その人の生き方を育てるみたいなさうい話になってきましたね。

#### 萩原

確かに先生に全て任せればいいっていう姿勢がまず間違ってますよね。何でもかんでも学校が教育すればそれで済むんだっていう僕ら大人の身勝手さが相当あるように思います。

そういう状況を変えるには、親を巻き込んでいくっていうのは大事なと思うんですよ。というのは例えば下流に暮らす子供達がですね、最上流の大滝村に行って山を見たといっても、子供の小グループや学校の先生が連れていくというのはほとんど不可能ですよ。

ほんとに真夏に、もう針葉樹林の方が全くカラカラに乾いているところを見て、そして今度は雑木林の中にちょっと入っていくと、清水がこう流れていて、それがひとつひとつの小さな流れになっていって、沢になって川に注いでいます。でもこれは実際に見ていないとわからないんですね。見れば、子供でも誰でも直感的にわかる。

そういうところにこう向かわせるにはどうしたって学校教育の枠の中では無理なので、僕みたいにビデオで作る。しかしそれを見せても限界があるんですね。実際に見ないといけない。となるとやっぱり実際に親が一日かけて連れて行くということが大切になると思うんです。



それとさっき言ったように、誰かを訪ねていくと何かを教えてくれるというような、それぞれのベースキャンプがあって、それをWEB探検隊みたいなものが組織化していくとも重要だと思います。このオーダーにはこういうふうにWEB上で答えられるとか、今暇だからこういうふうにとできるとか、学校の先生だけに押し付けているのではないやり方があると思うんです。

まず親から始まって、近くの大人達の支援があって、流域上の支援組織があって、さらにそこに向いていかせるという大人自身の学習があって...何かそういうものがリンクしていかないかなあと、思います。先生はそういうことの、高度なコーディネーターになるべきではないかと思うんです。

#### 司会

そうですね。

そういった中に、後藤先生がおっしゃるように単一的な見方から多面的な見方へと繋がって行くヒントがあるのかも知れませんね。

例えば学校のクラスではみんな同じ年ですよ。もう少し違った学年、中学生や高校生や大人も含めて、それぞれの知識の伝達といいますか、共同作業のようなことも総合学習では大事なような気がします。八木さんはどんなふうにお考えですか？

#### 八木

総合的な学習の狙いというのは、人間性と社会性が豊かな、思い遣りのある、しかも協調性のある子供を育てるとというのがひとつの狙いでもあるわけです。

わたしも子供の頃は街の角々に子供のグループがあって、そこにはガキ大将がいて、一緒に一日中遊び回っていたわけですけども、ガキ大将というのはやっぱり強きをくじき弱きを助けるという感じでした。その中でいたわりとか思い遣りとかってというのが自然と身についていったんだろうと思うんです。痛さも知るし、怪我をするまで喧嘩をしてはならんというようなこともだんだん身につけてくるわけです。

ところが今の子供ってというのは残念ながら、集団生活の機会も少ないし協調性や思い遣る気持ちを試される機会も少ない。総合的な学習というのはみんな横並びで、お互いに協力しながらやるということの積み上げですから、人間の基本的な資質が養われると思うんです。そういう意味で総合的な学習というのは非常に有効な場ではなからうかと私は思っております。

#### 萩原

あの、ガキ大将っていえばあれですよ。例えば川なんか遊びに行くと、どこが水流が激しくて危ないとか、どこだったら5才くらいまでは遊べるとか、そういうのをちゃんと仕切るじゃないです

か。

八木

ガキ大将っていうのは腕力が強いだけではガキ大将になれないんですよね。やっぱり人徳があって、勉強ができなくても何か尊敬できるものがある子がガキ大将になってましたね。

司会

今日来ておられる人は、実は昔ガキ大将だった人たちが多んじゃないかと思うんですけどもね。

ここで少し会場の皆さんから御意見なり御質問なりを受けたいと思うんですが…。

客席・1

佐藤と申します。荒川で子供達といろいろな川で遊びを一緒にやっています。

先日、小学校の先生が2人の男の子、6年生の男の子をつれてきたんですね。学校でピオトープを作りたいって言うてるんだけどなかなか場所がなくて、できないんでここに来たと。

それで早速中土手の池に入っていました。池にはグッピーやらいろいろな魚がいるんですけど、非常に気に入ったようでした。それでこの間、その子達に干潟で投網を教えたんです。岸边から投げたら一匹たまたま入って、もうこれが嬉しくてしょうがなかったみたいです。そういうふうにか何かひとつ面白いのがあると、子供達というのは非常に喜ぶですね。

さきほど後藤さんがおっしゃったように、面白い場所とそれからそういう遊びを教えてくれる人がいて、いつ来ればいいのかというのがわかるようになっていく...そういう場を作ることが大事じゃないかと思っています。

司会

佐藤さんはまさにそういう体験の場を子供達に提供なさっておられるんですね。そういう場があれば、子供達が自分でどんどん興味を広げていくと思います。そうなってくると、さきほど後藤先生がおっしゃったように、単一的な見方から多面的な見方へ広がっていくというか、“深め”ということが非常に大事になってくると思うんです。

その“深め”ということなどを踏まえて、今後の総合的な学習のありかた、あるいは我々の関わり方をお話いただけますか。

### 後藤

佐藤さんのお話などは、子供達が体験を通して知らなかった世界に入っていくという、本来の学びの姿だと思います。そこからもっと不思議なこととか、もっと追求したいことが出る...まさに感性の部分を揺さぶられながら、知の世界へ入っていくんだと思うんですね。

知というのは、教科書にある内容だけじゃありません。世の中のありとあらゆるものが学ぶべき対象だと思うんです。その時に必要なのが「学ぶ対象からどんなことを経験とともに学ばせればいいのか」という、カリキュラムだと思います。このくらいの年齢ではこういう経験によってこういう体感的なことが学べるとか、この年齢になったら抽象化して整理する力がつくからこういうことが学べる。あるいはやがてはそれを一般化する力や行動力にもってくためにどうするんだ、というような指針が必要になってくると思うんです。

もうひとつは、大人の姿を学ばせるというか、子供達に大人とはどういう生き方をしていくものなのかを学ばせるのは、実はこういう機会なんだと思うんですね。自分が面白いと思ったことを生涯に渡って追求していくっていうことが、どんな素晴らしいことなのかを子供に感じさせていく。そして大人はその子供の学ぶ姿に感動する...。それは学び合いなんですね。子供だけじゃなくて、実はそこで関わっている大人も学んでるんですね。子供のすばらしさを感じながら自分ががんばろうという意欲を、若いエネルギーをもらっているんです。こういうことがうまく機能すれば、社会の中でそれぞれの年齢が特性を発揮し、思いを発揮していくんじゃないかという気がしてなりません。

### 八木

長い一生の中で、人間形成に本当に必要なことを学ぶという点で、僕は、総合的な学習は絶対に成功させなきゃならん学習ではないかというふうに思っています。

そのためには、まず先生方が熱意と意欲をもって取り組むべきではなからうかと考えます。どういう力をつけさせるかという目標と、学習計画をきちんと立てて、それを支援するということが不可欠ではないかと思えます。

それからもうひとつ、子供達の面倒を充分に見るには、先生方とわたし達ボランティアだけでは限界があると思うんです。やはり地域の方々の力、協力、が絶対に必要だと思います。

### 萩原

それは何故だ、何のためにというのがすごく重要だと思っています。映像を作るときも、それを自分なりに掘り下げていくわけなんです。「何故」とか「何のために」ってものを総合的な学習の中でうんと深めていく、議論を深めていくべきじゃないのかなと。

例えば、夏の渇水時期になると、ニュースでカラカラに乾いたダム湖が映って、いよいよ危ないとかって報道されていますよね。でもそれは、その事実で止まってるだけなんですね。なんでダムが空になるのか。後ろにある山が乾いてきているというところに言及する報道は一つもないんです。

最初の事実で止まらずにその向こうにある本質に入って行く...そこへ向う洞察力というのが必要なんじゃないかと思います。

そしてそのためには、我々大人が常に議論を深めていなきゃいけない。やっぱり真理とか摂理ってということについて、もう一度自分達なりに考えていくことが必要なんじゃないかと。

例えば、全ての生命体は自然の循環の中で生きていけるわけです。その輪の中に全ての生命体があって外には何も無い。自分もその大きな輪の中で物を食べて、排せつして、生まれて、死んでいく...。そういう大きな視野を常にもちながら、一つ一つの小さな事実や遊びや興味を子供達と共有していくべきじゃないかと思います。

#### 司会

ありがとうございます。

総合的な学習、これ、総合的な教育じゃなくて「学習」なんですね。

子供達が学ぶと同時にそれに携わる大人達も学ぶし、先生も学んでいく。その中で、大人達の生き方を子供達に伝えていくことが大事だというのがひとつあったと思います。

そして2つめは、単一的な見方だけではなくて多面的な見方、監督の言葉を借りれば「何故」「なんのため」というような深め、その中で子供達に生きる力というものを育てていく。総合的な学習はその絶好のチャンスだということが2つめに言えると思います。

私達には荒川というフィールドがあるわけです。そこには「場」があり「人」がいると思うんですね。荒川を使って、荒川に集う人たちが、実体験という形で子供達に荒川を知ってもらい、素晴らしさを知ってもらい、そのチャンスを作ってあげることが大事なのかなと思います。いずれにしても子供達と接することは、私達自身の生き方を見てもらうってということにもなります。私達自身がガキ大将に戻ったつもりで、一緒に学んでいくってことだと思えます。

あらかわ学会に集う皆様方はまさに荒川のガキ大将の先輩達です。そのガキ大将が、学校の先生もガキ大将に育てるし、子供達も育てていく...子供達の成長のためにいいチャンスを提供していければと思います。

あらかわ WEB 探検隊も努力を続けていきたいと思いますので、皆様方の御支援どうぞよろしくお願いいたします。短い時間ではございましたが、パネルディスカッション終了させていただきます。これからがんばりますので、皆さんどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(了)